農経新聞
2018年(平成30年)11月5日(月曜日)

北九州の農業振興へ

中央市場で品種見本市

青果育種研

青果卸会社と種苗会社で構成する青果育種研究会（会長＝岩澤均・東京千住青果社長）は北九州市中央卸売市場で「第158回品種見本市」を開催し、種苗、包装資材の合計19社が出展した。同市では南部の小倉南区で軟弱野菜を中心に特産の「合馬たけのこ」など、北西部の若松区でキャベツ、ブロッコリーなどの露地栽培が盛んで、それらの多くが地元の北九州青果に出荷されている。関会に先立ち、同社の百合野博社長は生産者に対して、「ライフスタイルの変化で消費者の目が新たな野菜、食べやすい野菜に向いている。見本市を通じて新たなチャンスを見つけてほしい」「地元産の青果物を地元で消費することが北九州に良い循環を生む。安心して出荷してもらえる市場をめざして努力していく」と述べた。

北九州市はトマト、スイカ、シュンギクの県内有数の産地であり、このうち若松区では冬春キャベツの指定産地となっている。そのため多くの種苗会社がトマトをP.R.し、キャベツなどの出品もめだった。

トマトでは、タキイ種苗が九州の産地で栽培したミニの「ドカ千果」、大玉の「桃太郎ホープ」を紹介。ともにトマト産地で問題となっている黄化葉巻病の2系統に安定した耐病性を持ち、食味も良い。一方、サカタのタネは「市場業者に見て欲しい」と大玉で超硬玉の「聖月」をイチ押し。「果実が赤くなった状態で収穫しても硬さを保つため、スーパーで販売しやすい」とアピールする。

また、「味で勝負」というのは福井シード。果皮が口に残りにくい中玉の「華レジェンド」など4品種に絞って紹介した。

キャベツでは、住化農業資材が秋どりに適した変玉の「源一郎」を紹介。

福岡県からは中原採種場が出展し、JA北九州導入されているオオバシュンギク「ローマ春菊」をはじめ、ミニキュウリ、ナス、エダマメなどを出品。ローマ春菊は切込みがないため香りが少なく、鍋に使用したときに素材を引立てる。ミニキュウリは生食に適した「カリカリ千成」と、収量重視の「ドカ千成」で、ともに10㌢ほどで収穫する。ミニキュウリはまだ珍しく、「市場関係者の関心が高かった」との感触を得た。

JAの育苗施設とキャベツ圃場を視察

見本市の前日に行われた研修会では、小倉南区の育苗施設と、若松区のキャベツ圃場が出展し、JA北九・北九州東農業課が管轄する小倉南区を中心とする地域では軟弱野菜を中心に栽培。栽培回転数を増やすため育苗センターに苗を依頼し、定植からの栽培が多い。作付面積ではホウレン草が最も大きく、コマツナ、オオバシュンギクが続く。

育苗センターは鉄骨ハウス5棟（合計2…80平方㍍）、パイプハウス3棟（660平方㍍）、作業棟（510平方㍍）からなり、水稲、野菜、花きの苗を生産する。昨年度はホウレン草でペーパーポット（128穴）1603枚、オオバシュンギク2531枚、トマト2万6883本など生産した。

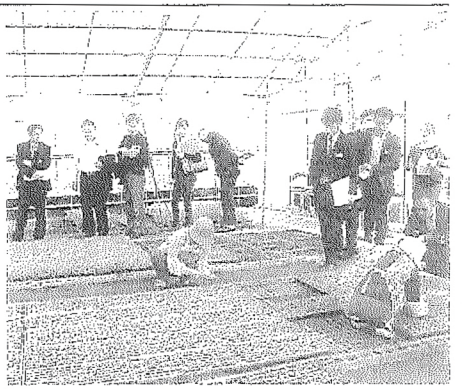
一方、若松区を主に管轄する北九州西営農課管内では、キャベツの栽培面積が最も大きく、ブロッコリー、スイカ、水稲、切りトマトが続く。

JA北九若松蔬菜部会（33戸）の栽培面積は80㌶。主に端境に面した圃場で栽培され、2013年から「若松潮風キャベツ」の名称で出荷する。調査では、潮風を受けて育ったキャベツは平均糖度が9度を超え、潮風を遮断して栽培したキャベツより糖度が1度以上高くなったという。現在は4戸がグローバルGAPを取得する。現在は北九州青果を中心に、他市場にも出荷している。

出荷期間は11月中旬～4月中旬頃で、9品種をリレー出し10品種を試験栽培する。JAでは種苗会社に求める品種として、「ダンボールが2段詰めのため扁平形のもの」「在圃性のあるもの」などと要望した。

見本市には約200人が来場（タキイ種苗のブース）

大玉品種の源一郎（左）。若松区での導入を狙う。葉に切込みのない「ローマ春菊」（下）



小倉南区の育苗センター

「松の舞」は果長10～12㌢で辛味が少ない